

本年中卒業生ニシテ圖画科教員免許狀ヲ受領セシ者十二人又生徒中徴兵適齡ニ付本校ノ証明書ヲ願出之ヲ交付シタル者四十八人又不都合ノ廉アリ本校規則ニ照シ譴責スル者一人停學ヲ命スル者一人除名スル者七人ナリ

(道庁府県別各科現員一覽表、經費、書籍器械の項省略)

報
告
受第九九號

庶第二〇七號

去ル八月卅一日附ヲ以テ本校第四年報及御送附候處右年報中經費ノ部ニ誤謬有之候ニ付訂正之上別紙及御送附候間午御手數最前差出候分ト御挿替相成度此段及御照會候也

明治廿六年十月十二日

東京美術學校

文部大臣官房

報告課御中

(別紙は省略。卷末表①明治二十五年の訂正金額参照。)

解説

1 規則改正

改正の要点は次のとおりである。

一、普通科、専修科を廃止し、予備の課程(一年)、本科(四年)を置き、専門実技教育の充実をはかった。

二、美術工芸科中に鑄金科を新設し、漆工科を蒔絵科と改称した。

三、特別の課程による教員養成を廃し、絵画科のカリキュラムに教職科目を設け、同科の教育の一環として教員養成を行うこととした。

四、図画講習科を新設し、現職教員の補修教育を行うこととした。

五、公立中学校卒業者のために入学試験における学科無試験規程を設けた。

2 鑄金科設置

鑄金に関する教育は既に明治二十三年から美術工芸科の金工の部門で行われていた。即ち金工専攻の生徒は第一年で、「造型」(土型蠟型等ニ由テ鑄造物ノ牝型ヲ造ルヲ教ユ)、「冶金法」(合金分金等金工ニ適當ナル冶金学ノ大要ヲ講授ス)、「金工史」、「図案」、「工場実習」などの授業で基本を学び、第二年以後、彫金、鑄金のいずれかを専修することになっていた。鑄金教育の指導者は岡崎雪声(前出)、蠟型の名人大島如雲、杉浦清太郎(明治二十四年解囑)、杉浦瀧太郎らで、鑄金科設置後も指導体制には特に変化は無かった。

3 〔コロンブス〕 閣龍世界博覧会

明治二十六年に米国シカゴ市で世界博覧会が開催されることになり、日本政府はかつて無い積極的姿勢で出品準備を開始した。その際、博覧会事務局副総裁として指揮にあたったのは本校と縁故の深い九鬼隆一であり、本校も必然的に協力体制をとることになった。そして、まず美術品として橋本雅邦の「山水図」、高村光雲の「老猿」、竹内久一の「伎芸天」などを含む六十二点が制作され、さらに今の万博日本館に相当する「鳳凰殿」の室内装飾制作が行われた。

この博覧会に際して岡倉校長は評議員（教育・心芸・衛生部、美術・美術工芸部、官庁出品部担当）兼鑑査官（彫刻類・金工類・織工類・版工類その他担当）を勤めたが、特に米主催者側が日本出品の美術品を工芸品ではなく美術品として展示するよう主張し認めさせた点で功績があった。このことは当時の新聞に次のように記されている。

評議員より日本美術品の性質に關して協議を提起したる者あり即ち本来西洋の美術品と云へるは唯油畫及び大理石の彫刻類に止まりて本邦の美術とする水畫なり七寶なり又た金銀象牙の細工物なり總べて之れを正式の美術品として公認し居らざるが如し勿論從來是等の日本品は默認の姿にて西洋美術品の班に加へられ居れりと雖も斯くては甚だ本邦美術品の爲めに遺憾なき能はず其發達の事情を異にして一種特色のものとなりたる本邦の美術品が其特色なるが爲めに公けに西洋の美術品に容れられざることありとしては寧ろ不都合の仕義たるべし或は日本の繪畫は繪畫に非ずして模様なりとの説もあらん歟なれども其繪畫が西洋の繪畫に似ざる所即ち本邦美術の特色たる所以にして之を西洋の模様に擬するなどは更に美術の眞味を知らざるの説なり兎に角今日日本の美術品を以て眞の美術品に非ずと思ふ者なきは必定なれば總て本を繪畫に取りて成たる物は其水畫たると細工物たるとを問はず悉く之を美術品として公認あらんことを請求すべし云々といふの趣旨にてこれには別段異論なかりし趣なれば何れ當局者に於て適宜に處置することならんと云ふ

（明治二十四年十二月二十三日『時事新報』）

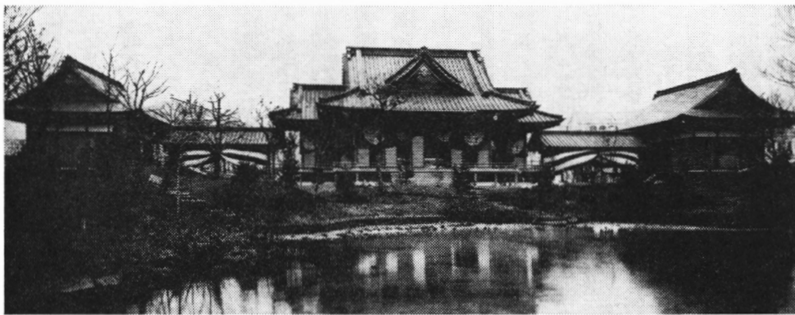
右は明治二十四年十二月二十一日の博覧会評議員會に關する記事で、文中の「評議員」が岡倉であったことは、同月二十二日付『横浜貿易新聞』

に「昨廿一日は岡倉評議員より提出せし美術品陳列の件は手島（精一）事務官をして米國博覧會事務局へ申入るゝことに決し云々」とあることによつて判明する。手島と米國側代表との協議の結果、この件は岡倉の主張どおりに採択された。『臨時博覧會事務局報告』（明治二十八年五月三十一日発行）にはこのことが「而シテ多年工藝品中ニ混入セラレタル我カ美術品ハ是ヨリ泰西美術ノ中ニ伍スルコトヲ得タリ」と記されている。

4 本邦家屋（鳳凰殿）

コロンブス世界博覧會に際して日本政府は會場に「鳳凰殿」と称する擬古の建物を建設して展示し、閉會後にそれをシカゴ市に寄贈した。前出『臨時博覧會事務局報告』には建設の趣旨が次のように記されている。

〔第四章〕第二十款 鳳凰殿
凡ソ博覧會ノ要ハ一國ノ物産ヲ出陳シテ彼我ノ特技、風俗長所等ヲ對照比較シ以テ大ニ人文ノ光華ヲ發揚シ一國ノ品位ヲ崇高ニシ且ツ頓テ以テ通商貿易ノ媒ヲ爲スニ在ルコト

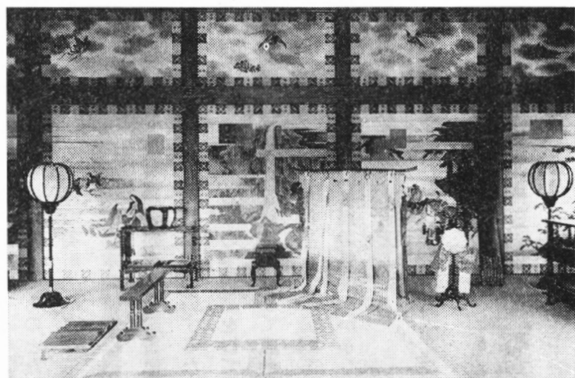


鳳凰殿 明治26年建設

（『臨時博覧會事務局報告附屬図』明治28年、同事務局より転載）

更に多説ヲ要セサルナリ
我國維新以來凡百ノ制度
概ネ模範ヲ西洋ニ取リシ
ヲ以テ我國情ヲ知ラサル
モノハ動モスレハ輒チ我
ヲ目スルニ晚開幼稚ノ國
ヲ以テシ其太甚シキニ至
リテハ支那ノ一部ヲ以テ
我ニ擬スル者アルニ至ル
豈ニ慨嘆ニ勝ユヘケンヤ
願フニ今回ノ閣龍世界博
覽會ノ如キ好機ニ於テ特
ニ壯觀雅麗ノ家屋ヲ建築
シ以テ東洋ノ一大帝國タ
ルノ實相ヲ表白シ併テ國

ヲ建ツルノ久シキヲ公示スヘキハ最モ必要ナルノミナラス亦一國ノ品位
ト威嚴トヲ發揚スルノ捷徑タルヲ疑ハス此故ニ何レノ邦國ニ在リテモ博
覽會ニ參同スルコトニ必ラス自國固有ノ堂宇家屋ヲ建築シ且ツ施スニ其
習慣風俗ノ一斑ヲ示スニ足ルヘキ裝飾ヲ以テシ大ニ自國ノ威嚴ヲ顯揚セ
ンヲ勉メサルハナシ而シテ我帝國ハ從前ノ博覽會ニ向テ未タ曾テ前述
ノ如キ家屋ヲ建築セサリシハ洵ニ遺憾トスル所ナリ然ルニ今回ノ閣龍世
界博覽會ハ富強世界ニ冠絶セル米國官民ノ殆ト全力ヲ盡シテ經營シタル
モノナレハ規模ノ宏壯ニシテ雄大ナル從來ノ萬國博覽會ト日ヲ同フシテ
語ルヘカラス加之參同國ノ多キ實ニ今回ヲ以テ最ト爲ス乃チ壯觀雅麗ノ
家屋ヲ建築シ以テ東洋悠久ノ一大帝國タル實相ヲ世界ニ發表スルニ於テ



鳳凰殿室内裝飾のうち、藤原氏時代式居間（同前）

洵ニ是レ千載一遇ノ機運タルナリ然ルニ此目的ヲ達センニハ輒近ノ建築
式ニ依ランヨリハ寧ロ昔時ノ様法ニ取ルヲ以テ優レリトス蓋シ我國古來
建築ノ精美ヲ盡シ雅巧ヲ致シタルハ天平ニ始マリ藤原足利二氏ニ至リテ
極レリ天平ハ今ヲ去ルコト一千二百有餘年ニシテ二氏ノ盛時數百年前ニ
在リ若シ外人ノ我國情ニ通セサルモノヲシテ美術工藝ノ進歩ノ千二百有
餘年前業ニ已ニ此ノ如ク最大高度ニ達シタルヲ知ラシメハ彼レ必ラス其
我ヲ蔑スル所ノモノ翻シテ我ヲ敬重スルノ念ヲ生スルニ至ラン果シテ然
ラハ其國權ヲ伸張シ國威ヲ發揚スルニ於テ重要ノ關繫ヲ有セスンハアラ
ス是ヲ以テ古來建築ノ粹ヲ鍾メタル彼永承年代ノ建設ニ係ル宇治鳳凰堂
ノ様式ニ法トリ一聯三棟ノ家屋ヲ建設シ而シテ其内部ノ裝飾ハ藤原足利
徳川ノ三時代ニ符合スルモノヲ施シ其周圍ニハ我庭園ヲ造リ以テ該建築
ノ秀致ヲ助クルノ設計ヲ爲シタリ

初メ右ノ古代家屋ノ形狀及ヒ其内外ノ裝飾ハ金閣寺ト鳳凰堂トノ二様ニ
就キ其一ヲ撰擇スルコト、ナシ調査ノ末鳳凰堂ニ決シ之カ全體ノ設計ヲ
東京美術學校ニ托セリ於是同校ハ直ニ其設計ニ着手シ大家名流各々力ヲ
盡シテ之ヲ分擔セリ〔下略〕

このように、外観は宇治の平等院鳳凰堂に倣い、屋内は中央(約二十坪)
を徳川時代風に、左(約十坪)を藤原時代風に、右(同上)を足利時代風
に作り、各時代の室内裝飾を施した建物が作られ、その中に帝國博物館出
品の家具調度品が備え付けられた。建物の設計者は文部技師久留正道(明
治二十四年六月〜同二十六年二月本校「建築裝飾術」授業嘱託)で、日本
土木会社が建造を担当し、明治二十六年三月落成。室内裝飾の製作を担当
した本校では二十五年の春から十月下旬までの間、教官生徒ともども夏休
み返上で製作と取り組んだ。同年九月二十九日から三日間、関係者を本校

に招いてほぼ完成した製品を公開。その記事が各紙に掲載されたが、その中の一つ、『時事新報』（九月三十日）は次のように報じている。

○鳳凰堂^{〔4〕}内部の美観 明年米國シカゴ府に於て開設する世界大博覽會へ我が農商務省より出品する鳳凰堂は純然たる日本風宮殿の一部分を構造し内部の天井欄間等に於ける繪畫彫刻の美術を古代・中古・今代に取り中央の鳳凰堂は徳川氏時代、兩袂ともいふべき右手の一室は藤原氏時代、左手の一室は足利氏時代の繪畫を寫し出し優美の中に韻致を有ちて俗に流れず渾て都雅高尚を旨とし本邦固有の美術を普く外國人に示さんとの趣意にて之を美術學校に囑托せし處同學校に於ては限り有る校費を以て彫刻といひ繪畫といひ金碧燦然たる着色を施し生徒養成上充分の満足を与ふる事能はず常に之を遺憾とする折柄なれば同校の榮譽といひ生徒の稽古には得難き仕合せなれば暑中休暇をも廢して藤原氏の古代に逆り東山時代を穿鑿して圖案を考究し、藤原時代は繪畫教授巨勢小石氏、足利時代は同川端玉章氏、徳川時代は橋本雅邦氏、彫刻は彫刻教授高村光雲氏之を擔當して生徒に従事せしめ昨今猶着色中なるも竣功の分丈を假に組合せ昨二十九日同校の樓上に於て主務省の官吏及各新聞社員等に一覽せしめたり鳳凰堂に於ける合天井の如きは合計三百枚なるも僅かに三十枚前後を組み立て其黒塗の格子に金色の金具を裝りたるは四枚のみにて只其一部を知らしめたるに過ぎずされど此の一部四枚の格子を箴めたるを見て三百枚を想像すべく何れも雌雄の鳳凰を向ひ合せて圓形に寫し花桐の唐草様にあしらひ正面床の間は金地に櫻を畫き襖の一面は同じく金地に桐と鳳凰又一面（裏表にあらず）は梅に水禽游泳の圖にて何れも當時名家の畫風を顯はせしものなり又藤原氏足利氏兩時代の二室は金地に桐と鳳凰を一對に畫ける天井にて足利時代の襖は金地に塗骨七本

の扇面數十枚を寫し或は疊み或は半ば開きたるものあれど多くは全開し花鳥山水人物等これも當時の畫風に模擬して思ひ思ひの圖様を顯はしたり此の扇面は一圖必ず一人の手に成りしものにて合天井の鳳凰が百枚百様なると違ひ各自腕を揮ふて譽れを外國に求め且は平素學藝上の點數を多く取らんと競争したるものなれば一層見榮えあり藤原室は巨勢金岡等の古圖に倣ひしものにて四季の山水人物等を夫々畫き分けたり此の室の前面は美麗なる簾を垂れて香爐峰雪掲簾看の時代を想ひ起さしむ又欄間の彫刻も表裏桐に鳳凰の透し彫りにて着色の工合新ものと思はれず流石其道の達人が教授に成りしものとて感心の外なし右は昨日素人目に見したるまでに批評を下すの明に乏しく之を博覽會場に裝飾せし曉は金碧爛燦如何に氣高き事ならんか觀る者をして坐ろに渡航の念を生ぜしむるといふ

「鳳凰殿」については前出『臨時博覽會事務局報告』によつて室内裝飾各部分の作者名を知ることができ、同書の附屬圖（別冊）によつて概況もわかるが、最もよい資料は岡倉校長が自ら執筆した英文解説書（THE HŌ-Ō-DEN, By OKAKURA KAKUDZO, K. OGAWA, PUBLISHER, 1883, Tokyo）である。これには各時代の建築および建築裝飾の様式、裝飾製品と作者などが詳しく紹介されており、また、*“JAPAN, the Land of the Rising Sun, has been from ancient times considered the birth-place of the HŌ-Ō (or phoenix).”*と、大層高揚した調子で始まる序文も、「鳳凰殿」室内裝飾の製作によつて本校を国家的事業に参加させることに成功した岡倉の得意な心中を彷彿とさせるものがある、一種興味をひく。本校がこの種の室内裝飾を担当することは開校前から計画されていたもので、フェノロサの発言（『日本美術行政に関する提言』『フェノロサ資料』一六二頁）によればそれは本校の最大の努力目標の一つであったが、

岡倉はコロンブス世界博覧会という好機をとらえてその計画を実現したのであった。なお、フェノロサはこの博覧会の際に主催国側の美術審査委員として、あるいは講演を行って日本美術の宣揚につとめた。

5 校友会建物

「校友会倶楽部」として長く愛用された建物で、増築修理、会議室への転用などを経て第二次大戦敗戦直後には本校関係者の合同宿所と化し、荒廃して昭和三十四年に取り壊された。この建物は最初、桜井敬徳僧都のためにビゲロウが小石川に「円密道場」として建てたもので、敬徳歿後、本校内に移築したのである。敬徳は三井寺法明院住職で、教部省教導職として東京でも活動。岡倉、フェノロサ、ビゲロウらの師であった。

6 西郷隆盛銅像

明治二十二年、故西郷隆盛に復位の恩命が下されたのを機に銅像建設の計画が始まった。楠公銅像の場合と同様、計画のブレインは九鬼隆一で、まず、左記のような図案懸賞募集を行った。

贈正三位西郷隆盛君銅像圖案懸賞募集廣告

今般贈正三位西郷隆盛君紀念ノ爲メ有志相謀リ適當ノ地ニ銅像ヲ建設候ニ付威容端嚴ニシテ君力維新ノ元勳トシテ朝廷ニ大功偉績ヲ致サレタル風采ヲ示スニ足ルヲ旨トシ左ノ制限ニ由リ右銅像ノ圖案ヲ募集ス

一 馬上高サ二丈以下一丈以上ノ事 一 陸軍大將ノ軍服ヲ着スル事 一 場所ハ未定ナレトモ東京市内ノ公園ニ裝置ノ事 一 賞金一百円ノ事

一期限ハ今年十二月十日マテニ左ノ場所ヘ送致有之度事 一 圖案ハ彫刻ニ適スルヲ目的トシ向背二面ヲ差出スベキ事

明治廿二年十月十一日

麹町區三年町一番地

樺山資紀

九鬼隆一

(明治二十二年十月十五日『東京日日新聞』広告欄)

この募集廣告が示すとおり、当初は陸軍大將の軍服を着けた乗馬姿の像を作り、東京市内の公園に据え付ける計画であった。さらに、「紀念銅像建設趣意書」(明治二十三年二月二十五日付『東京朝日新聞』所載)を見ると、その像を数丈の台石に乗せることや、上野公園に建設することなどが計画されていたようである。しかし、その計画では巨額の経費を要するため、一丈二尺の立像を建てることにした。藤田文蔵の談話(後出)によれば、この段階で原型の公募が行われたらしいが委細不明である。

明治二十五年に至り、本校は右の制作を一任された。それは建設委員長樺山資紀と九鬼との相談で決められたことで、経費は二万二九五〇円であった。本校では岡倉校長指揮下、教官たちが各方面から資料を集めて像姿の検討を行い、高村光雲、後藤貞行、山田鬼斎(のちに林美雲に交替)らが校内で制作に着手した。彼らははじめ募集廣告どおりに陸軍大將の正装を着けた立像の木彫雛形(二十六年完成)を作ったが、議論が起こったため、現在のような遊獵姿に改めて、三十年春に木型を完成させた。鋳造担当は岡崎雪声で、美術学校騒動を挟んで三十一年五月に完成。台座は塚本靖の監督によるもので、同年十二月十八日に除幕式が行われた。岡崎雪声は次のような制作談を残している。

○岡崎雪の西郷銅像鑄造談

本日上野公園に於て除幕式舉行せらるべき老西郷の銅像に付鑄金主任岡崎雪聲氏語りて曰く

銅像建設の計畫熟して寄附金募集に着手せしは遠く明治廿二年中なりとの事なるが美術學校が其の製作一切を請負ひしは確か廿五年の夏と覺ゆ而して最初木彫部に於て之が模型を製作し余の手に渡りしは漸やく昨年三四月の候にして完成せしは本年五月廿五日所謂美術學校騒動の正に天下を驚かしつゝある頃なり然れば世上或ひは岡崎の銅像々々々々と稱せらるゝもの少なからざれど岡崎の手を下したるは僅かに其の後半部にして意匠構造組織の大體に關しては全く木彫主任高村光雲外數氏の功に歸せざるべからず殊に老西郷は生前嘗て寫眞を撮りし事なかりしため其の肖像に就ては人の知る能はざる苦心をなし先づ元印刷局御雇キヨソネ氏の石版畫を根據として翁が生前の知己親戚に付き一々其の好否を問ひ服裝もはじめ陸軍大將の正服なりしが後平服に犬を牽きたる現在のものに改め石膏像をも幾度か造りて幾度か壞ち木彫に移りても亦削りつ添へつ非常の經營を重ねし由而して斯くの如きは獨り當局其の人にのみ止らず局外の諸氏も亦非常の熱心を以て之を輔け青森縣知事河野主一郎氏の如き城山没落まで翁に従ひ常に其の髻剃り役を勤めしとの故を以て殊に一昨年の中炎天を冒して日々美術學校へ通はれ彫刻手に助言して身自ら職工とならんばかりに盡力せられたり

斯くして造り上げられたる模型は慙不肖岡崎の手に渡されぬ諸氏が苦心も諸氏が熱誠も成すと成さぬとは余が双肩にかゝり老西郷を生かすも殺すも一つに余のか弱き腕に任せられたり茲に於てか余は沈思數日如何にして諸氏が苦心を水泡に歸せしめず老西郷の風貌をして永く生けるが如くならしむべきかを思ひめぐらし遂ひに丸鑄きの法を取る事に決したり蓋し丸鑄きは鑄金中の尤も難なるものにして殊に一丈三尺の立像と云ふが如き事は我邦に未だ例あらざる事なれば鈍き腕の或ひは如何かと思はざるにもあらざりしが西郷其の人の膽と量とを現はさんには之れを鑄

くも又之に相當するの用意と心術とを以てせざるべからずそれには登り鑄き又は取附けの法によらんよりは寧ろ難くとも一氣呵成の丸鑄きにすこそよけれと思も着々其の準備に取掛りたり

而して愈々溶鐵を注ぐべく決定せしは昨年の十二月廿三日、委員職員諸氏をも招きて千二百貫の溶鐵を沸かしたて模型をば十分に鐵の箱にて締め用意を全く整へて、一聲の號令と共に注ぎ畢はりたり其の狀のすさまじき其光景の壯快さは到底身其の境に臨まざれば解する能はず一滴體に飛びかゝるとも直ちに肉の内にメリ込む如きたぎり立つたる湯の飛滴粉々たる中を縦横に飛び交ふ職工十數人之を指揮する余自身も亦實に戰場に臨みたらんが如く鑄き上がるまでは吾身にして吾身にあらざるが如き感ありき而かも斯くして鑄き上げたる銅像は不幸にして思ひしまゝの成績を見る能はず一時に注ぎ込みし勢にて模型を締めたる鐵の箱ハネて肩のほとりに一寸餘の吹き出しをなし従つて脚部に溶のまはり方少なかりしにぞ直ちに又三百貫の溶鐵を沸かして脚部に鑄き足し漸く此の部分だけは完全ならしむるを得たり然れど肩の吹き出しは如何すべき歟模型を取り除くまでは安き心もあらざりしが、扨愈々除く段になりしに不思議にも吹き出しは吹き出しの如くに見受けられず反つて原型よりは肩の一層張りしたため老西郷らしき處を生じ委員諸氏の鑑定を請ひしに孰れも過が反つて功名となりしとて余も漸く心を安んずるを得たり而して余は之を最後の製作として同日直ちに辭表を呈出し岡倉氏と共に今は此の美術院にて不相變好める道をはげみつゝあり此の暮れまでには豊橋より依頼されし神武天皇の九尺像も完成すべければ重ねて來給へ又ゆる／＼御話申さん是ればかりは實地ならでは了解する能はざるもの故(文責は一に記者にあり 桂陵)

(明治三十一年十二月十八日『国民新聞』)

ところで、この銅像の原型も楠公銅像と同様、木彫教官のみで作った。

洋風彫刻家である藤田文蔵は明治二十三年十二月以降植田榮齋が京都清水に建設を計画していた西郷隆盛銅像の原型制作を手掛け、キョソーネ筆の肖像画および西郷の関係者の意見に基づいて塑造原型を完成させた。その仕事は榮齋の死去によって宙に浮いてしまったが、原型はその盡手元にあったので、藤田は当然上野の銅像の原型としてそれが活用されることを期待したのである。しかし、実現はしなかった。それに関して藤田は「塑像家藤田文蔵氏」『新小説』第四年第三巻。明治三十二年二月五日）に次のような興味深い談話を残している。

丁度其時上野へ西郷翁の銅像を建てるので廣く其製作の募集が出たので、自分も是迄に爲たのであるから斯の機を幸ひに是を持出したのです。同時に大熊氏も造つて出す、其からもう一個誰でしたか應じた者がありました。審査も首尾よく済んで、僕は其時の美術學校長岡倉覺三氏から君の出したのが彌々採用されたといふ報告に接しました。

物事は不思議ですね、其頃日本の美術界に西洋主義と日本主義との大衝突があつて小山正太郎、浅井忠等の人々が十分氣焰を吐いた事がある、然し詰るところ日本主義の方の旗色が盛んで、其名残は西郷翁の像も日本の木彫で爲る事になった。で岡倉さんが或日自分を呼んで、是々の始末で仕方が無い、就ては君も彼^{おん}だけに苦心を爲て造つた物であるし、審査の上君のを採用するに極つたのであるから、何うか彼の肖像を學校へ譲つて呉れまいか、費用は何程でも出すと言はれたが、僕は其は御免を蒙ると斷然御ことわりを爲た、岡倉さんは今一度君も考へて置いて呉れと其儘に別れて了つたので、其後彼方からも言出さず、此方からも返事を爲すに過ぎたが、學校で高村光雲氏が木彫に着手したとは聞きまし

た。

なお、同誌には藤田の西郷像（胸像、塑造）と上野の西郷銅像の写真が並んで掲載されている。

7 日蓮上人銅像雛形

現在、博多東公園にある日蓮上人の大銅像（*copy*）は、明治二十一年に福岡県下の日蓮宗徒（代表佐野前勸）によって建設計画が始まり、同三十七年十一月に落成したが、製作の大半は本校が担当した。まず、この二十五年に該銅像の雛形製作が本校に依頼され、その際、校友会が懸賞図案（下図）募集を行い、下村觀山作の右手に安国論の巻物を握り、左手に数珠を持つ日蓮像の図案と、島田佳矣作の台座の図案とが一等に選ばれた。雛形制作の担当者となった竹内久一はさらに細かい考証を加えて図案を作り、それによって木彫の雛形（1/50）を製作。岡崎雪声がこれを鑄造した。二十七年に至り三丈二尺の銅像原型（木型）と台座型の製作が本校に依頼され、同じく竹内久一が翌二十八年に本校内の製作場で銅像原型の製作に着手し、翌二十九年六月に完成。次いで岡崎雪声が本校内の鑄造場で頭部と両手首の鑄造に着手し、同三十一年、美術學校騒動後にこれを完成。胴体の方は佐賀の谷口鉄工所が分鑄法によって鑄造した。当時は近世最大の銅像として世の注目を集めたもので、その製作技法等については『福岡市東公園「日蓮上人銅像」』（中牟田佳彰・田中一幸・木下禾大共著。昭和六十一年。西日本新聞社）に詳かである。

関連事項

① 二十五年経費と校長謹責